

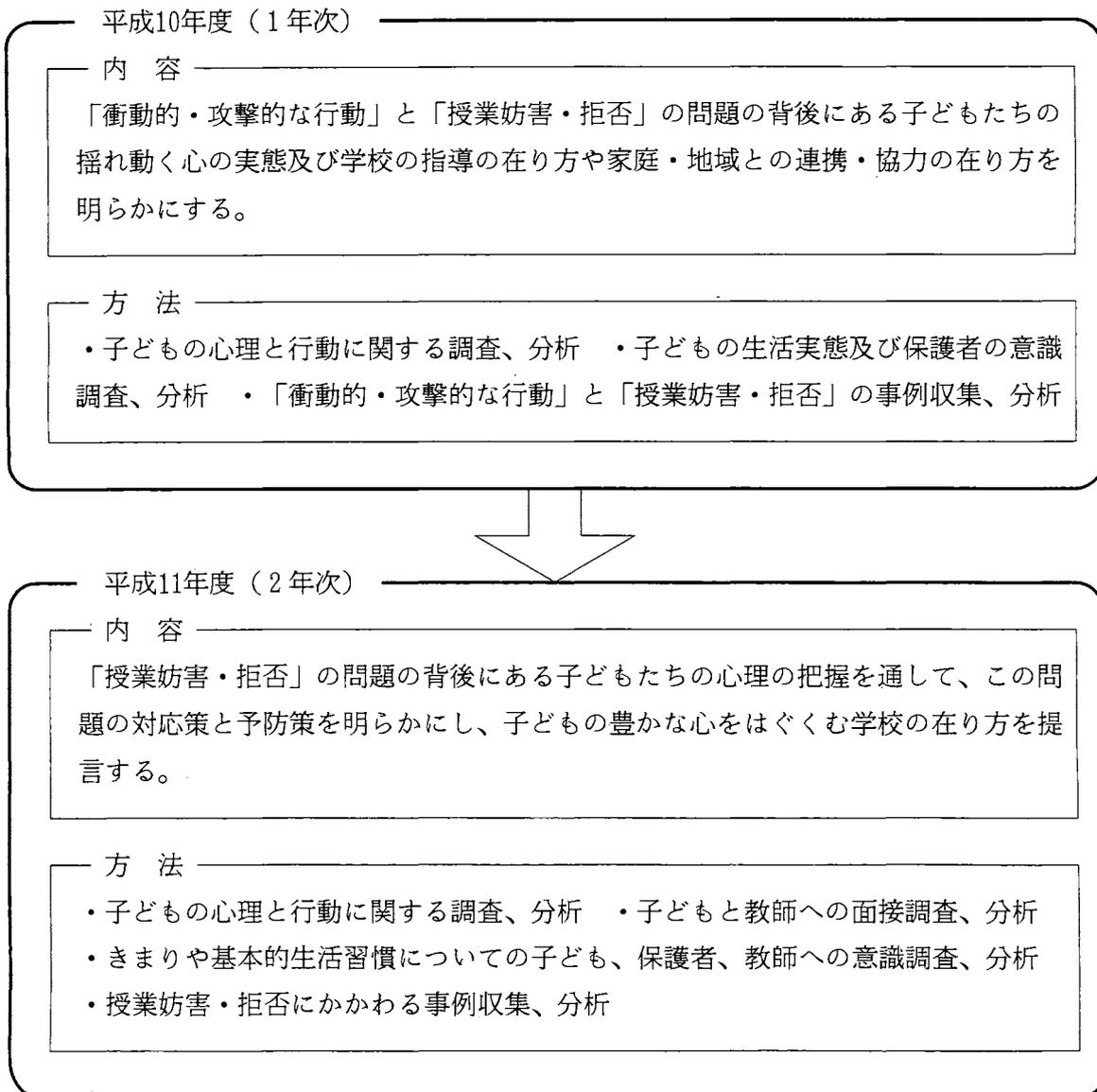
# 第1章 研究の基本的な考え方

## 1 研究の内容・方法

### (1) 研究のねらい

- ① 授業妨害・拒否の背後にある子どもの心理を把握し、「揺れ動く心」の実態を解明する。
- ② 授業妨害・拒否についての対応策や、子どもたちの豊かな心をはぐくむ人間関係を築く具体的な指導の在り方を明らかにする。
- ③ 子どもたちが個性・能力を発揮し、心豊かに生きることができるよう、家庭・地域と連携・協力した学校の在り方を提言する。

### (2) 研究の構想



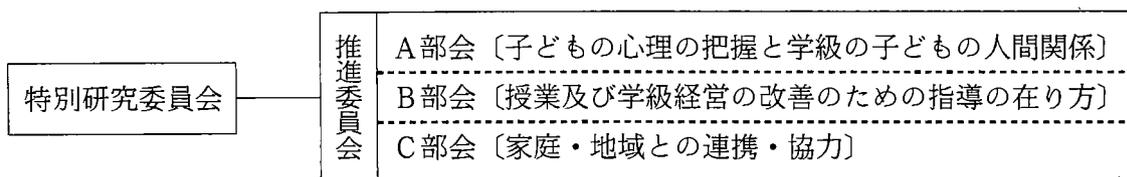
子どもたちは、葛藤したり不安になったりするなど、心が揺れ動く中で成長していく。しか

し、現代の子どもたちは、その「揺れ動く心」を適切にコントロールできず、様々な問題行動につながることが多い。本研究では、その「揺れ動く心」を「イライラする、ムカつく、キレるなどの言葉で表現する感情や行動の背景にある不安定な心」ととらえた。そして、これらの感情は、子どもたちの中では未分化な状態にあると考え、これらを総称して「イライラ感」と命名し、その実態を明らかにしてきた。子どもたちの「衝動的・攻撃的な行動」と「授業妨害・拒否」の問題とは、一見別の問題に見えるが、両者の根底には「イライラ感」の広がりに関係しているものにとらえることができ、両者を合わせて考察することとした。

今年度は、授業妨害・拒否の問題が、解決しなければならない緊急かつ重要な課題であることから、特に小学校における授業妨害・拒否をする子どもたちの心理や行動を追究し、具体的な対応策を明らかにすることとした。

### (3) 研究の組織

都立教育研究所は、教育庁指導部、都立多摩教育研究所の協力を得ながら下図のような組織で研究を進めた。



### (4) 調査の概要

調査名	調査内容	調査対象	実施	結果																																		
子どもたちの心理と行動に関する調査	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どものイライラ感と対処の仕方</li> <li>・学級のモラル(士気)と子どもたちの人間関係</li> <li>・担任と子どもとの人間関係</li> </ul>	<table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">学年</th> <th colspan="2">第1回質問紙</th> <th colspan="2">第2回質問紙</th> </tr> <tr> <th>対象数</th> <th>有効数</th> <th>対象数</th> <th>有効数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>3年</td> <td>203</td> <td>201</td> <td>50</td> <td>50</td> </tr> <tr> <td>4年</td> <td>206</td> <td>203</td> <td>58</td> <td>58</td> </tr> <tr> <td>5年</td> <td>211</td> <td>209</td> <td>62</td> <td>62</td> </tr> <tr> <td>6年</td> <td>214</td> <td>210</td> <td>49</td> <td>49</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>834</td> <td>823</td> <td>219</td> <td>219</td> </tr> </tbody> </table>	学年	第1回質問紙		第2回質問紙		対象数	有効数	対象数	有効数	3年	203	201	50	50	4年	206	203	58	58	5年	211	209	62	62	6年	214	210	49	49	計	834	823	219	219	6月 ・ 10月	P. 8  P. 10  P. 22
		学年		第1回質問紙		第2回質問紙																																
対象数	有効数		対象数	有効数																																		
3年	203	201	50	50																																		
4年	206	203	58	58																																		
5年	211	209	62	62																																		
6年	214	210	49	49																																		
計	834	823	219	219																																		
		低学年児童との面接：小学校1校 1年41名、2年65名、計106名		P. 18																																		
集団生活のきまりや基本的な生活習慣についての調査	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども、保護者、教師の学校、家庭等における集団生活のきまりの意識</li> <li>・基本的な生活習慣の定着状況及び家庭や地域での役割等の実態</li> <li>・子どもの学校生活への適応に関する意識</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校4校の児童 4年～6年 計 633名</li> <li>・小学校4校の全学年の保護者及び教師 教師 144名 保護者 662名 計 806名</li> </ul>	10月	P. 30  P. 31																																		

## 2 子どもたちの揺れ動く心の実態と対応（平成10年度の研究から）

### (1) 子どもたちの揺れ動く心の実態

- ・ イライラ感は学年進行とともに漸増し、特に小5と中2で高くなる。
- ・ 子どもたちは友達関係の中で、イライラしたりホッとしたりすることが多い。
- ・ イライラ感の高い子どもは不安・抑うつ感やこだわり感が高く自己肯定感が低い。
- ・ イライラ感の高い子どもは集団からの影響を受けやすい。
- ・ イライラ感は抑制的な対処では解消されにくく、ほどほどの対処で解消されやすい。

### (2) 子どもたちの揺れ動く心の背景

- ・ イライラ感の高い子どもは、「寝る時刻が夜中の12時を過ぎる」「朝食を食べないで学校に行く」などの傾向が強い。
- ・ イライラ感の高い子どもは、「家庭でも気が休まらない」と強く感じている。
- ・ 子どもの志向には「一人でいたい」「人とかかわりたい」の両面があるが、一人志向が半数以上あり、特に中2の段階で一人志向の割合が増加する。
- ・ 子どもの「友達との関係」のことで悩む保護者が増えてきている。
- ・ 学年が上がるにつれて、保護者の子育ての悩みは深刻になりがちであるが、身近な相談相手が少なくなる傾向がある。

### (3) 子どもたちの揺れ動く心への対応について（提言）

- ・ 教師と保護者は、子どものサインを受け止め、子どもを支える。
- ・ 教師と保護者は、子どもの感情を受け止め、体験や自己表現の場を拡大する。
- ・ 学校と家庭が協力して、子どもが基本的な生活習慣を身に付けるようにする。
- ・ 学校と家庭が協力し、子どもの気持ちに寄り添い子どもの居場所作りに努める。
- ・ 教師は、集団の影響を理解し、子どもが主体的に行動できる雰囲気を作る。
- ・ 校長は、自ら状況を把握し、見通しをもって問題解決に当たる。
- ・ 教師は、自分の学級の子どもだけでなく、学校全体の子どもを育てる姿勢をもつ。
- ・ 教師は、これまでの教育観や子ども観を見直し、指導の改善を図る。
- ・ 学校は、保護者の声をよく聴き、子育ての相談ができる場や機会を提供する。
- ・ 学校は、開かれた学校を推進し、家庭・地域社会との連携を深める。

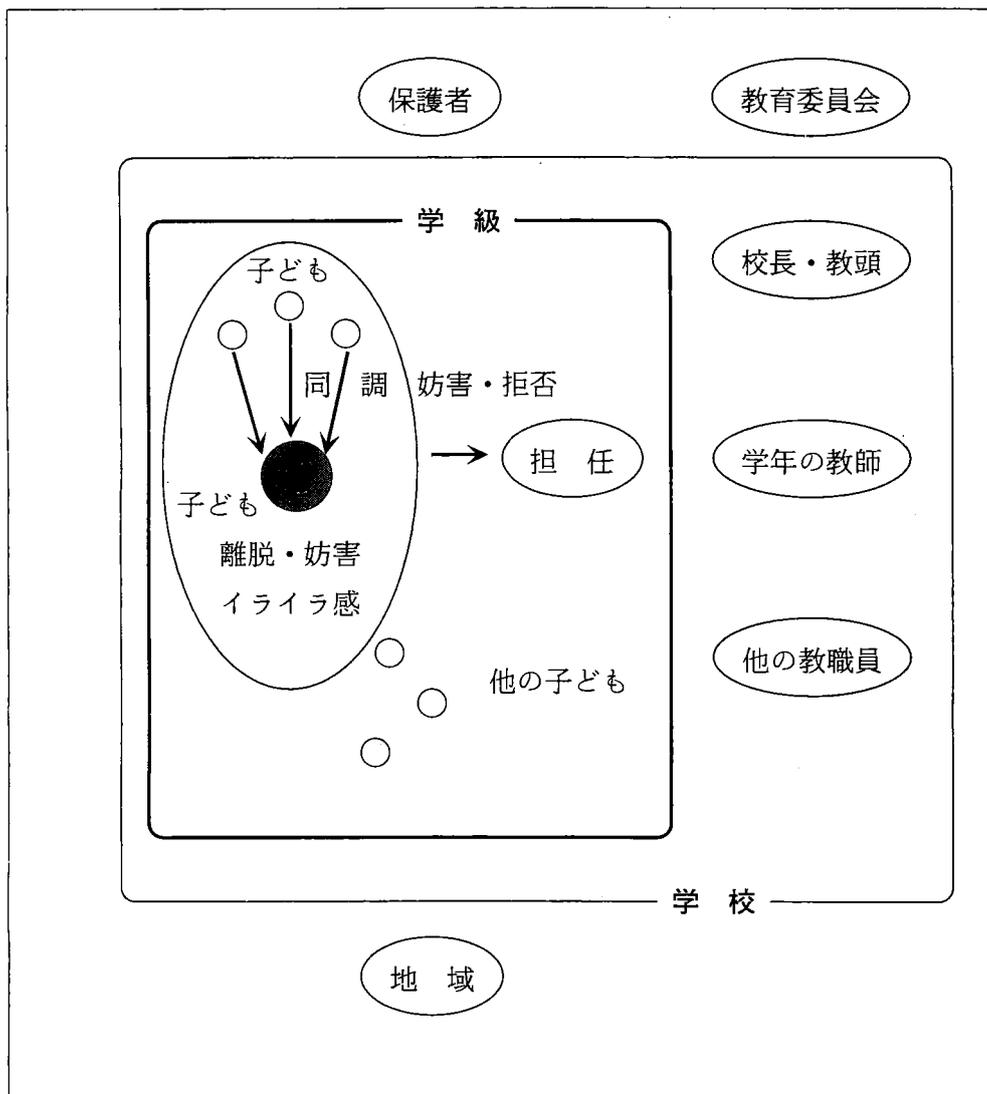
### 3 授業妨害・拒否のとりえ方

#### (1) 授業妨害・拒否とは

授業妨害・拒否は、意図の有無にかかわらず、子どもたちが授業から離脱したり授業の進行を妨害したりすることにより、授業を正常に行うことが困難になる状態をいい、いわゆる「学級崩壊」につながる具体的な現れである。

授業妨害・拒否は、学校生活になじめなかったり、授業に不満をもったりした子どもによる、授業からの離脱行動や私語、立ち歩き、担任等への攻撃的行動などの妨害行動と、その他の子どもが同調する行動から成り立っている。そして、それらに適切に対応できない時、授業が成立しなくなり、いわゆる「学級崩壊」を生み出すものと考えられる。

#### 〈学級を舞台とした授業妨害・拒否の概観〉



## (2) 授業妨害・拒否にかかわる要因

授業妨害・拒否にかかわる要因については様々考えられるが、本研究では収集した事例を分析し、以下のように分類した。

<p>教師の問題</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもとの信頼関係を構築するための能力・態度の不足</li> <li>・受容的な態度の欠如</li> <li>・子どもとのコミュニケーションを図るための基本的な資質や能力の不足</li> <li>・子どもにとって魅力ある授業を実践する意欲や力量の不足</li> <li>・教師としての信念に貫かれた一貫性の欠如</li> <li>・子どもの変化に対応できる柔軟性の欠如</li> <li>・自分一人だけで対応しようとする閉鎖的な考え方 など</li> </ul>
<p>教師と子どもの関係の問題</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・互いに心を開く機会や活動の不足</li> <li>・感動や喜びを共有する場の不足</li> <li>・授業の進め方の意識のズレ など</li> </ul>
<p>子どもや学級集団の問題</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校生活の基本的なきまりや生活習慣の未習得</li> <li>・耐性、規範意識の不足</li> <li>・落ち着き、集中力、学習意欲の不足</li> <li>・仲間から注目されたいという願望</li> <li>・思春期における不安定な心理</li> <li>・仲間意識や帰属意識が低い学級集団 など</li> </ul>
<p>学校の在り方の問題</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・当事者意識に乏しい体制の問題</li> <li>・校長の危機管理意識、リーダーシップの弱さ</li> <li>・教師同士が助け合う意識や体制の不足</li> <li>・保護者や地域と連携・協力する姿勢や体制の弱さ など</li> </ul>
<p>保護者・家庭の問題</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもを受容する、叱る、しつける能力の低下</li> <li>・子どもの規範意識や社会性の低下を容認する保護者の意識や態度</li> <li>・子育てに関する交流の不足 など</li> </ul>